

「藤原氏の栄枯盛衰」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 誕生 ～鎌足と不比等

藤原氏(ふじわらし)と言えば、大化の改新などで功績のあった中臣鎌足(なかとみのかまたり)が、死の直前に藤原の姓を朝廷から贈られたことで有名ですね。

鎌足以降も、藤原不比等(ふじわらのふひと)や藤原仲麻呂(ふじわらのなかまろ)など、彼の子孫が奈良時代に活躍したほか、平安時代に入ると、藤原道長(ふじわらのみちなが)・藤原頼通(ふじわらのよりみち)父子の頃に、藤原氏の権勢は頂点を迎えます。

しかし、その後は巻き返しを図った皇室によって藤原氏の権力は衰え、やがて武士の世の中になると、政治の表舞台から完全に消え去ってしまいました。

その後の藤原氏についてですが、たとえ実権は失っていても、一時期は皇室よりも優位に立っていたことや、あるいはその末裔(まつえい)が国政の最高責任者にまで出世していた事実を皆さんはご存知でしょうか。

我が国の歴史に深くかかわった藤原氏を検証することによって、私たちは大きな歴史の流れをつかむことが出来るのです。今回の講座では、そんな藤原氏の栄枯盛衰(えいこせいすい)について、時間をかけてじっくりと確認していきたいと思います。

鎌足の祖先である中臣氏は、古代から我が国において神事(しんじ、神を祭る儀式のこと)や祭祀(さいし、神や祖先を祭ること)を担当してきた豪族ですが、かつては我が国における仏教の受けいれに反対し、物部氏(もののべし)とともに廃仏派として、蘇我氏(そがし)と対立したこともありました。

戦いに敗れた中臣氏は勢力が一時衰えましたが、蘇我氏の横暴を許せなかった鎌足は、蹴鞠(けまり)の会をきっかけに中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)と知り合い、二人は協力して645年に蘇我入鹿(そがのいるか)を暗殺しました。

入鹿の暗殺を聞いた父の蘇我蝦夷(そがのえみし)は抵抗をあきらめ、翌日に屋敷に火をかけて自殺しました。こうして蘇我氏の本家を滅ぼした鎌足は、以後は中大兄皇子とともに新しい政治を行うこととなります。

なお、最近では入鹿が暗殺された事件そのものは「乙巳(いつし)の変」と呼ばれ、政治改革である大

化の改新とは区別されているようです。

鎌足は、大化の改新後に新設された内臣(うちつおみ)に任じられ、中大兄皇子を助けて政治の表舞台で長い間活躍しました。その後、669年に病に倒れた鎌足は、中大兄皇子から即位された天智(てんじ)天皇によって、大織冠(だいしょくかん)の地位と「藤原」の姓を贈られました。

鎌足はその後まもなく死去しましたが、鎌足によるこれらの功績が、結果として我が国の歴史に名を残す藤原氏の礎(いしずえ)となったのです。

とはいうものの、鎌足の実績だけで藤原氏の存在が大きくなったわけではありません。藤原氏が本当の意味で我が国の歴史に欠かせない重要な地位を占めるようになったのは、むしろ鎌足以下の子孫の生きざまにその理由がありました。

その大きなきっかけになった人物こそが、鎌足の子の藤原不比等だったのです。

659年に生まれた不比等は、幼い頃に父である鎌足を亡くしましたが、成年後には着実に出世していきました。不比等は701年に大宝律令、718年には養老律令の編纂(へんさん)事業に携(たずさ)わり、朝廷からの厚い信任を受けました。

当時の朝廷は、707年に文武(もんむ)天皇が崩御(ほうぎょ)されると、その後は文武天皇の母親で、天智天皇の娘でもある元明(げんめい)天皇と、元明天皇の娘で文武天皇の妹でもあり、皇室の血を引く元正(げんしょう)天皇が相次いで即位されました。

しばらくのあいだ女性天皇が続いたことは、結果として不比等の存在を朝廷内で大きくしました。さらに不比等は、娘の藤原宮子(ふじわらのみやこ)を文武天皇に嫁がせると、二人の間に産まれた首皇子(おびとのみこ)に対し、自分の娘で宮子の異母妹(いぼまい、母親のちがう妹のこと)にあたる藤原光明子(ふじわらのこうみょうし)をさらに嫁がせて、皇室と密接な関係を築きました。

こうして不比等は、自分の血を引く娘を皇室に嫁がせることで自らの地位を固めるという、かつての蘇我氏と同じ方法で政治の実権を握ることに成功したのです。

2. 発展 ～奈良時代

藤原氏が政治の表舞台に登場するきっかけを作った不比等でしたが、彼が720年に亡くなると、4人の息子がまだ器量不足だったこともあり、皇族で天武(てんむ)天皇の孫にあたる長屋王(ながやおう)が右大臣(後に左大臣)となり、政治の実権を握りました。

巻き返しを図りたい藤原四兄弟の武智麻呂(むちまろ)・房前(ふささき)・宇合(うまかい)・麻呂(まろ)は、首皇子が即位された聖武(しょうむ)天皇の後(きさき)であり、自分たちの妹でもある光明子を皇后にしようと計画しました。

皇后は天皇の代わりに政治が行えるほか、場合によっては自らが天皇として即位できるという大変重い地位でした。しかし、律令では「皇后は皇族に限る」と明記されており、藤原氏出身の光明子が皇后になれる資格はなく、長屋王もそれを理由に四兄弟の願いを退けました。

このこともあって、長屋王と藤原四兄弟との仲は次第に険悪になっていきましたが、そんな折にとんでもない事件が起こってしまうのです。

727年、聖武天皇と光明子との間に待望の皇子が誕生しました。皇子が無事に成長すれば、やがて天皇に即位することで藤原四兄弟が外戚(がいせき、母方の親戚のこと)となり、藤原氏の栄華が約束されることになった一はずでした。

ところが、翌728年に皇子は1歳足らずで亡くなってしまったのです。聖武天皇や光明子、そして四兄弟にとって大きなショックでしたが、四兄弟は、不幸を逆手にとって大きな陰謀を計画しました。

悲しみに打ちひしがれた聖武天皇に対して「皇子が亡くなられたのは、長屋王がそうなるように呪ったからだ」と事実無根の噂を広めたのです。我が子を亡くして精神的に弱られていた聖武天皇は、結果としてこの讒言(ざんげん、他人をおとしめるために事実でないことを告げろすること)を信用されてしまいました。

729年2月、天皇に対する反逆の罪で邸宅を軍勢に取り囲まれた長屋王は、自らの無実を訴えましたが、結局は一族とともに自殺しました。この事件を長屋王の変といいます。

長屋王の変の直後に、光明子は聖武天皇の皇后となりました。皇族以外の人間が皇后になったのは我が国史上初めてのことであり、これ以降の彼女は光明皇后と呼ばれることとなります。

藤原四兄弟も同時に昇進し、再び藤原氏が政治の実権を握ることになりました。四兄弟は、武智麻呂が南家(なんけ)、房前が北家(ほっけ)、宇合が式家(しきけ)、麻呂が京家(きょうけ)のそれぞれの始祖となりました。

まさに我が世の春を迎えた四兄弟でしたが、その繁栄は長くは続きませんでした。四兄弟には過酷な運命が待っていたのです。

737年、九州地方から発生した疫病(えきびょう)である天然痘(てんねんとう)が、都の平城京(へいじょうきょう)でも大流行しました。藤原四兄弟も相次いで天然痘にかかり、何と全員がそろって病死してしまったのです。あまりの凶事、そしてあまりの偶然に、当時の朝廷では「長屋王のタタリが起こった」と恐怖におびえました。

相次いで病死した藤原四兄弟の子孫たちがまだ若かったので、皇族出身で臣籍降下(しんせきこうか、皇族の身分を離れて一般の貴族になること)した橘諸兄(たちばなのもろえ)が政治の実権を握りました。

諸兄による政治に反発した藤原氏は、四兄弟の宇合の子の藤原広嗣(ふじわらのひろつぐ)が740年に北九州の大宰府(ださいふ)で大規模な反乱を起こしましたが鎮圧され、しばらくは政治の表舞台から遠ざかりました。

しかし、749年に聖武天皇の娘の孝謙(こうけん)天皇が即位されると、天皇の母親である光明皇太后が、四兄弟の武智麻呂の子である藤原仲麻呂を重用したことで、やがて仲麻呂は政治の実権を握るようになりました。

仲麻呂は755年に諸兄を失脚させ、諸兄の子の橘奈良麻呂(たちばなのならまる)が乱を起こそうとすると事前に鎮圧しました。こうして自分に不満を持つ政敵を一掃することに成功した仲麻呂は、ますます自己の権力を高めていきました。

758年に孝謙天皇が退位され、仲麻呂と縁(えにし)の深かった淳仁(じゅんにん)天皇が即位されると、淳仁天皇は仲麻呂に、貨幣の鑄造権や税の徴収権とともに、恵美押勝(えみのおしかつ)の名を与えられました。

恵美押勝は天皇に準ずる権力を持つまでに出世しましたが、朝廷の官職を中国風に改めたり、外交に関する強引な姿勢を見せたりすることで、次第に周囲の反感を買うようになっていきました。

こうした中で、最大の後ろ盾であった光明皇太后が760年に死去して、孝謙上皇が自らの病を祈祷(きとう)で治した僧の道鏡(どうきょう)とともに政治の表舞台に再び登場すると、恵美押勝の勢力は急速に衰えていきました。

焦った恵美押勝は、道鏡を追放して孝謙上皇の権力を抑えようと、764年に反乱を計画しましたが事前に発覚し、逆に攻められて滅ぼされました。また、恵美押勝と関係の深かった淳仁天皇は孝謙上皇によって廃位となり、淡路(あわじ、現在の兵庫県淡路島)に追放されてしまいました。この事件を恵美押勝の乱といいます。

その後、孝謙上皇が重祚(ちようそ、一度退位された天皇が再び即位されること)されて称徳(しょうとく)天皇となられると、天皇は道鏡を重用されて、ついには自らの後継者として道鏡を指名する決意をされました。

そんな折、769年に北九州の大宰府から「道鏡が天皇の位につけば天下は太平になる」との宇佐八幡宮(うさまちなまぐう)からの神託(しんたく、神からのお告げのこと)があったとの報告がありました。

称徳天皇は大いに喜ばれ、和氣清麻呂(わけのきよまる)に真偽を確認させましたが、和氣清麻呂は「皇位は神武(じんむ)天皇以来の皇統が継承すべきである」との神託を持ち帰りました。

称徳天皇の逆鱗(げきりん)に触れた和氣清麻呂は、名前を「別部穢麻呂(わけべのきたなまる)」と無理やり改名させられたうえに大隅(おおすみ、現在の鹿児島県)に追放されてしまいました。これを宇佐八幡宮神託事件といいます。

道鏡への皇位継承の夢が破れた称徳天皇はやがて重い病となられ、770年に53歳で崩御されました。称徳天皇の崩御によって後ろ盾をなくした道鏡は下野(しもつけ、現在の栃木県)に追放となり、その地で亡くなりました。

称徳天皇の崩御後、次の天皇に誰を即位させるかについて朝廷内で協議が行われ、最終的に四兄弟の宇合の子の藤原百川(ふじわらのももかわ)や、房前の子の藤原永手(ふじわらのながて)が支持した光仁(こうにん)天皇が即位されました。

光仁天皇は自らのご即位に貢献した藤原氏を重く用いるようになり、その流れがそのまま平安時代にも続くこととなります。

かくして、鎌足以来の藤原氏は紆余曲折(うよきよくせつ、物事が順調に運ばずに複雑な経過をたどること)の奈良時代を乗り切り、平安時代においてさらに栄華を極めるようになるのですが、それまでの道のりも決して一筋縄ではありませんでした。

3. 完成 ～道長・頼通父子まで

光仁天皇の子の桓武(かんむ)天皇が平安京に遷都(せんと)された頃、桓武天皇の子で皇太子の安殿(あて)親王は身体が弱く、病気がちでした。

そんな親王の後としてある女性を選ばれた際に、女性が幼かったために母親も後見役として一緒に迎えられましたが、ここでとんでもないことが起きてしまいました。

何と親王と後の母親とが「男女の関係」となってしまったのです。その母親こそが、藤原氏の式家の血を引く藤原薬子(ふじわらのくすこ)でした。安殿親王と薬子との不倫ともいえる関係に激怒された桓武天皇によって、やがて薬子は朝廷から追放されてしまいました。

しかし、桓武天皇が崩御され、安殿親王が平城(へいぜい)天皇として即位されると、薬子は再び召(め)し出されました。二人の関係が深くなることで、薬子の兄にあたる藤原仲成(ふじわらのなかなり)も出世を重ね、朝廷では仲成・薬子兄妹による政治の専横が続きしました。

809年、平城天皇は病気のために弟の嵯峨(さが)天皇に譲位されました。平城上皇は旧都の平城京に移られて療養されましたが、やがて健康を回復されると再び政治に意欲を持たれて、嵯峨天皇と対立し始められました。

兄の不穏(ふおん)な動きに対して、嵯峨天皇は810年3月に天皇の命令を速やかに伝えるための秘書官としての役割を持つ蔵人所(くろうどどころ)を設置され、側近の藤原冬嗣(ふじわらのふゆつぐ)らが、その長官に当たる蔵人頭(くろうどのとう)に任命されました。

810年9月、平城上皇はついに平城京への再遷都を宣言され、朝廷に反旗を翻(ひるがえ)されましたが、事前に動きを察知された嵯峨天皇によって阻止されました。敗れた上皇は出家され、仲成は射

殺され、葉子は毒をあおって自殺しました。この事件を葉子の変といいます。

この結果、藤原四兄弟の宇合を始祖とする式家(しきけ)は没落(ぼつらく)し、房前の子孫である藤原冬嗣が率いる北家(ほっけ)が力をつけるきっかけになりました。この後、北家の子孫は皇室との結びつきを強めて次第に勢力を伸ばしていくことになるのですが、その背景には「藤原氏以外の他家の勢力が大きくなならないうちに潰(つぶ)す」という策略もありました。

例えば 842 年には、伴健岑(ともこのわみね)や橘逸勢(たちばなのはやなり)らが皇太子を東国へ移して謀反(むほん)をたくらんでいるとして処罰されたり、866 年に平安京の応天門(おうてんもん)が炎上した際には、事件の首謀者として伴善男(とものおしお)が処罰されたりしています。

なお、842 年の事件は承和(じょうわ)の変、866 年は応天門の変と呼ばれています。

承和の変や応天門の変によってライバルを蹴落(けお)とした藤原氏は、冬嗣の子の藤原良房(ふじわらのよしふさ)が 866 年に皇族以外で初の摂政(せつしょう、天皇が幼い時などの場合に政治を代行する職のこと)に正式に任命されました。

さらに、良房の養子の藤原基経(ふじわらのもとつね)が 884 年に関白(かんぱく、天皇の成人後に政治を代行する職のこと)に任じられると、藤原氏はますますその権力を強めることになりました。

その後、菅原道真(すがわらのみちざね)が重用されて藤原氏の勢力が一時は弱まりましたが、901 年に道真を嘘の密告で陥(おとし)れ、大宰権帥(ださいごんのそち)へと左遷(させん)させました。この事件は昌泰(しょうたい)の変と呼ばれています。

こうして他家に対する容赦ない謀略を続けた藤原氏でしたが、969 年に源高明(みなもとのたかあきら)を謀反の罪で大宰府へ流すという安和(あんな)の変を起こすと、藤原氏に対抗できる他氏勢力がついに存在なくなり、以後は藤原氏が摂政や関白を独占することになりました。

他の勢力を排除したことで権力をほしいままにした藤原氏を待ち受けていたのは、同じ一族による骨肉の争いでした。この戦いを最終的に勝ち抜いた人物こそが藤原道長だったのです。

道長は 4 人の娘を天皇の後として自らは摂政となり、約 30 年にわたって権力を握り続けました。彼が絶頂の頃に詠(よ)んだとされる「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」という歌はあまりにも有名ですね。

道長によって全盛期を迎えた藤原氏の権力は、子の藤原頼通にそのまま引き継がれました。始めは摂政、やがて関白となった頼通は、約 50 年に渡って政治の実権を握り続けました。

このように 10 世紀後半から 11 世紀後半にかけて、藤原氏が摂政や関白を独占して行った政治のことを摂関(せつかん)政治といい、摂政や関白を出した家柄のことを摂関家といいます。

4. 実は不可思議な藤原氏の栄華

藤原氏の天下は道長—頼通時代に頂点を迎えました。その実態は「自分の娘を天皇に嫁がせて、生まれた皇子を次の天皇として即位させることで、自らは外戚として政治の実権を握る」というものでした。

実は、世界史的に見れば、このような形式は有り得ないのです。

なぜなら、通常であれば藤原氏のようなややこしい立場をとらずに、前の皇帝や国王を追放（あるいは殺害）して、自身が王位に就(つ)くのが当然だからです。現実には洋の東西を問わず、日本以外の国では何度も同じようなことが行われてきました。

それなのに、なぜ藤原氏は自身が天皇になろうとしなかったのでしょうか。その理由としては、先述した宇佐八幡宮神託事件の際に「皇位は神武天皇以来の皇統が継承すべきである」と決められたことが挙げられます。

また、事件の以前であっても、蘇我入鹿のように皇位を狙った人物が目的を達成できないままこの世を去ったように、神武天皇やその祖先である天照大神(あまてらすおおみかみ)の血を引く人物でなければ天皇になれないという不文律(ふぶんりつ、文章で表現されていない法律や約束事のこと)が存在していました。

つまり、藤原氏といえどもその不文律を破ることが出来ず、この後に天下を取った源氏(げんじ)や足利氏(あしかがし)、あるいは徳川氏(とくがわし)も、皇室に関しては原則としてアンタッチャブルのままだったのです。加えて藤原氏には、その出自から「天皇に逆らって自身が皇位を継承する」ことが許されない宿命がありました。

その根拠が、実は神話にあるのです。

藤原氏、すなわち中臣氏の先祖は天児屋根命(あめのこやねのみこと)と呼ばれていますが、この神様は天照大神が天岩戸(あまのいわと)に籠(こも)られて、この世が真っ暗になってしまった際に、岩戸の前で祝詞(のりと)をあげて、天照大神が岩戸から出てこられるように試みたと伝えられています。

また、天照大神の命によって、皇孫(こうそん)の瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が、高天原(たかまがはら)から日向(ひゅうが)の高千穂(たかちほ)に天降(あまくだ)りなされたという天孫降臨(てんそんこうりん)の際に、天児屋根命は瓊瓊杵尊に付き従ったとされています。

つまり、藤原氏は神話の代から皇室に忠実に仕える家であると決められていました。そんな思いがあったからこそ、藤原氏の権勢がどれだけ強力なものになろうとも、自分が天皇になろうとは思わない、いや思えなかったのです。

また、武家として初めて政権を握った平氏や源氏も、古くは皇室の血を引いていましたから、本家

を侵すことが出来ずに朝廷をそのまま残しましたし、その考えが足利氏以降の武家政権にも脈々と受け継がれています。

我が国では、神話が長いあいだ常に意識されてきました。そんな思いが長年の伝統として自然と皇室を尊敬する気持ちを高めるとともに、藤原氏自らが天皇になるという道を閉ざしてきたのです。

5. 没落と復活と ～平安後期以後

さて、約 50 年に渡って摂関政治の実権を握ってきた藤原頼通でしたが、天皇の後となった頼通の娘が皇子を産むことができなかったことで、藤原氏の権勢にも陰(かげ)りが見え始めました。

1068 年に藤原氏を外戚としない後三条(ごさんじょう)天皇が即位されると、翌 1069 年には延久(えんきゅう)の荘園整理令を出されて、藤原氏の大きな財産であった荘園を大幅に削減されました。

また、後三条天皇の子の白河(しらかわ)天皇が幼い実子に譲位されると、お自らは幼い天皇を後見するという名目で、新たに白河上皇として政治の実権を握られました。

つまり、それまでの摂関家にかわって、天皇の父(あるいは祖父)が上皇として天皇を後見する制度が定着したのです。院政(いんせい)と呼ばれたこの手法によって、藤原氏の権力は急速に没落しました。

さらに院政が始まって約 100 年後には、平氏や源氏によって武家政権が誕生したことによって、藤原氏は政治の実権を完全に失い、摂政や関白は事実上の名誉職へと押しやられてしまったのです。

鎌倉時代に入ると、藤原氏の系統のうち、嫡流(ちやくりゅう、正統の血筋のこと)にあたる 5 つの家が、交代で摂政や関白に就任するようになりました。

すなわち、近衛家(このえけ)・九条家(くじょうけ)・二条家(にじょうけ)・一条家(いちじょうけ)・鷹司家(たかつかさけ)の 5 家が、本姓(ほんせい)は藤原氏をそのまま使用しながらも、一般的には地名や屋敷名を苗字(みょうじ)として名乗り始めたのです。

なお、明治時代までは本姓と苗字とは明確に区別されていました。例えば徳川氏は正しくは苗字で、本姓は源氏(げんじ)です。

こうしていわゆる五摂家(ごせつげ)が摂政・関白を独占する時代が続きましたが、それらは政治の実権とは全く別の存在であり、有名無実(ゆうめいむじつ、名ばかりでそれに伴う実質のないこと)そのものでした。

しかし、そんな五摂家が、一人の戦国武将によってにわかに脚光を浴びるようになっていったのです。

織田信長(おだのぶなが)の事実上の後継者として天下取りに名乗りを挙げた羽柴秀吉(はしばひでよし)で

したが、彼にはそれまでの身分が低いという大きな弱点がありました。

足利將軍家の養子になろうとして断られたとも伝えられる秀吉は、自身の弱点を補うために、皇室のご威光を利用しようと考えました。つまり、自らが関白となり、天皇に代わって政治を行おうとしたのです。

しかし、関白は五摂家が交代で就任することになっていました。このため、秀吉は五摂家の一つである近衛家の養子となり、1585年に藤原秀吉(ふじわらのひでよし)として関白に就任しました。

さらに翌1586年には、朝廷から新しい姓である豊臣(とよとみ)を賜(たまわ)り、豊臣秀吉と名乗りました。つまり、秀吉は「羽柴」という苗字はそのまま、藤原から豊臣へと改姓したことになります。

なお、豊臣氏は姓であることから、豊臣秀吉の呼び方は「とよとみひでよし」ではなく「とよとみのひでよし」が正しい、という考えもあるようです。

こうして摂関家以外から関白に就任することに成功した豊臣氏でしたが、秀吉の死後は急速に衰え、やがて徳川氏が天下を統一しました。

徳川家康(とくがわいえやす)が朝廷から征夷大將軍に任じられて江戸幕府を開くと、家康は朝廷への支配を強化するため、1615年に禁中並公家諸法度(きんちゅうならびにくげしよはつど)を制定しました。

諸法度の制定の際に徳川氏が何よりも気を配ったのが、幕府の皇室に対する影響力を強めようとしたことでした。その手段として、幕府は摂関家の地位を高め、天皇の子である親王よりも上位と決めました。

また、幕府は將軍の正室(せいしつ、いわゆる本妻のこと)を摂関家から迎えるなど関係を強化することで、摂関家を通じて朝廷を幕府の意のままにコントロールしようとしたのです。

こうした幕府の姿勢によって、摂関家は政治の実権こそ失われていたものの、幕府とは比較的友好関係を築くとともに、朝廷での地位を高めることになりました。

江戸幕府が倒れて明治時代になると、五摂家は華族となり、爵位(しゃくゐ)としては最高の公爵に叙せられました。

明治23(1890)年に我が国で議会政治が始まると、五摂家は貴族院の議員として活躍することになりますが、これは発展途上にあつた議会政治や政党政治に対する抑えという意味もありました。

時が流れて昭和を迎えると、五摂家の筆頭という家柄を持ち、端正な風貌(ふうぼう)かつ颯爽(さつそう)とした長身で、大衆的な人気を得た貴族院議長が現れました。

その家の血筋は江戸時代に一旦は断絶したものの、外孫(がいそん、他家に嫁いだ娘にできた子のこと)として

皇室の血統を迎えたことで、高貴さが強化されていました。

彼はやがて昭和 12（1937）年に内閣総理大臣にまで出世して、血統が違うとはいえ、藤原氏の末裔が国政の最高責任者として君臨する日がやって来たのでした。

彼の名を近衛文麿(このえふみまる)とといいます。

国民や各界の期待を一身に背負って誕生した近衛文麿内閣は、中断の時期をはさんで 3 回組織されました。

しかし、彼が在任中の我が国は決して望ましい状態とはならず、最後の内閣を事実上投げ出した昭和 16（1941）年 10 月からわずか 2 ヶ月後に、我が国はアメリカとの果てしない戦争の日々を送ることになってしまいました。

昭和 20（1945）年に我が国が終戦を迎えると、近衛文麿は連合国軍最高司令官総司令部（＝GHQ）からの指示による憲法改正に意欲を見せましたが、やがて先の戦争責任を問われ、戦犯容疑で逮捕が決定的となり、絶望した彼は毒をあおって自殺しました。

ちなみに、戦後の五摂家は伊勢神宮の大宮司(だいぐうじ)など神官を務めている人が多く存在しています。また近衛家はその後再び血統が途絶え、同じく外孫が後継者となりましたが、その兄が平成 5（1993）年に内閣総理大臣となった細川護熙(ほそかわもりひろ)氏です。

近衛文麿と細川護熙の両氏がいずれも国民の期待を背負って首相に就任しながら、その途中で内閣を投げ出した格好となってしまったことは、歴史における何とも言えない皮肉なのでしょうか。

これまで述べてきたように、藤原氏は神話の時代を含めて絶えることなく存在し続け、我が国の歴史に少なからず影響を与え続けてきました。

その栄枯盛衰ぶりは時代の流れを象徴するとともに、藤原氏の歴史をたどることで、我が国の大きな歴史のうねりを理解することにもつながります。

通常歴史教育で今回のような流れを振り返ることは、時間などの制約で非常に難しくなっていますが、教師として実践する立場としては当然理解しなければならないことであり、今回のような長丁場の講座にも意義があると考えております。

これからも様々な切り口で数多くの歴史講座を展開してまいりたいと思いますので、今後ともお付き合い下さいますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 3 古代言霊編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379414>

「逆説の日本史 4 中世鳴動編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379415>

「逆説の日本史 5 中世動乱編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379416>

「日本の歴史 1 古代篇」 (著者：渡部昇一 出版：ワック)

YouTube 再生リスト「藤原氏の栄枯盛衰」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML7faKAL1RqpeLQ4rZoEVsPO>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>